

リクライニング&ライジング
イサドラ・ダンカン芸術舞踊について

中里有輝子（社会人 一般）

イサドラ・ダンカンのリクライニング&ライジングをとりあげる。そのコリオグラフとそこに込められた感情とに、動きのフレーズ、流れ、放出などのモダンダンスの要素を照らし合わせると、作品があたかもモダンダンスのエッセンスで構成されているかのようである。そのことに着目し、今回あえてダンカンの芸術探求の試みやテクニックの面からではなく、主に「舞踊評論家 J マーチン氏の言葉を用いての 1 作品の解説」を試みた。イサドラ・ダンカンの芸術を客観芸術とみなすことへの理解を深め、そしてその正当化に説得力を与える考察、すなわち、「イサドラ・ダンカン作品がいかにモダンダンス芸術であるかの解明」を目的にしている。

《イルマ・ダンカンの言葉と、舞踊評論家 J マーチン氏の舞踊評論とを一部照合》

イサドラ・ダンカンは舞踊人生のはじめに、動きの原理、動きは内なる衝動から生まれ、途絶えることのない波のように全方向に広がっては戻り、常に新しくなり続けることを発見した。そして自分の見出したこの原理が、古代ギリシアの人物彫刻の中に表現されていたことに気づいた。
イルマ・ダンカン

舞踊に関する総合的な創造上の問題の要点となる動きは、感情から直接的に放出される。基本的な感情を基とした第一の動きがあり、そこから慎重に案出されメカニックでなく一種の自然反応として、一連の動きが流出される。表現力豊かなフレーズが生まれることは、純粋に偶然のことではなく、個人的感情経験、個人の生活のプライベートで、いろいろな意味合いを含んだある事柄から純粋な金属を抽出し、個人的経験を芸術の素材とに変えることで、舞踊作品の最も重要な要素であり、才能を最も必要とする。

踊り手はたんに惰性となりさもなれば制限され抑圧されている、ある種の習慣的反応から我々を引出し、その中で人生を認識させ、解放し恵み豊かな新しい反応を持つべく我々を導こうと望んでいる。我々の感情を変化させ、経験を増大させる。自分自身の感情のたかぶりの中へと押し上げ、ただその場限りの気まぐれに対応して飛び回ること、はるかにまさることを果たす。踊り手がめざすのは我々に伝達する特別の反応

を誘発させようとする、そして素材に系統を与え、踊り手が先に得た新しい反応を我々の経験に与え、我々にある特殊な対象と場に対する経験をもつことを希望するのである。

舞踊家は時々性格描写を抽象という方法で行う。それは類型の性格描写である。平凡かつ個人的で特殊な自然のままの身振りは除外される。模倣は、純粋に客観的な意味を持ちすぎているため、経験の同一化を完成させることはできない。その素材は、そこに含まれている感情の激しい内的達成を基礎におき、直感的なものとなり、感覚的な美を高揚する結果、時には理想化、または歪曲が避けられず、芸術が存在する代償世界の創造が叶う。

J マーチン

“表現舞踊とイサドラ・ダンカン”

舞踊の、音楽にあわせ振り付けられた動きは魂といわれる感情の表現であり、知的な思考により練り上げられ創られるタイプの芸術とは別種の魅力がある。自己表現の衝動性において、純粋さが際立つことに対するの評価も存在する。そして、イサドラ・ダンカンの芸術、振付全般には、断定的断言的(predicative)と言えるような力を感じる。あたかもその振付が音楽の中にすでにもとから存在しており、靈感(直感)によりそれを浮き彫りにするような作業でも施されたのではないかという捉え方すら閃く。

イサドラ・ダンカンの意義深い革命により、舞踊の様式化されていた具象主義は大きい一歩を踏み出し、より抽象に近づいたとされている。イサドラ・ダンカンの登場により、初めて表現舞踊が芸術として誕生した。ダンカンは魂を発見し、動きを人間の感情と直接に結びつけた。知的抑制を積み重ねた歳月を払拭し、ダンカンが魂という言葉で表した内面に、動きの力を従わせたのだ。

表現舞踊は、古代人の間にも長期間存在し、その後数世紀の間に一度ならず瞥見され、バレエ史にも多くの影響を及ぼしたが、舞踊におけるロマン主義の目標である。

《参考文献》

J マーチン 著 小倉 重夫 訳 舞踊入門
イルマ・ダンカン 著

イサドラ・ダンカンの舞踊テクニック
Andrea Mantell Seidel 著

Isadora duncan in the 21 century
Capturing the Art and
Spirit of the Dancer's Legacy